



生くる我とゆめみる我と

佐藤弓生

片山廣子

新
歌人群像

文才と環境に恵まれて

清部千鶴子著「片山廣子 孤高の歌人」(短歌新聞社)が出版されて今年で十年になる。人物研究と作品鑑賞に加えて歌集『翡翠』全編も収録され、片山廣子の仕事を一望するのに手ごろなテキストであることは現在も変わらない。今世紀に入って散文集『燈火節』と歌集・資料集『野に住みて』(月曜社。筆名・松村みね子を併記、後述)が刊行され、翻訳を除く著作の全貌が一覧できるようになった。こうした注目の静かな高まりは奈辺に由来するのだろうか。

片山廣子は一八七八(明治十一)年二月十日、東京麻布生まれ。父は外交官で海外勤務が多かったため、母、妹、弟たちだけの生活をたびたび経験した。東洋英和女学校を卒業して十八歳で佐佐木信綱の門に入り、一八九八(明治三十一)年、「こころの華」(後年の「心の花」)創刊時から短歌や随筆を発表。翌年には大蔵省に勤める片山貞次郎と結婚し、夏目漱石が「吾輩は猫である」を執筆したという駒込千駄木の家に住む。

阿部光子の短編「ひとつの樹かげ」(『その微笑の中に』所収、新潮社)に「佐佐木信綱

が、廣子さんは文芸の才に恵まれておられるから、将来その才能が伸びるように、理解ある人を良人に選んであげて欲しいと勧めた」とのエピソードが記されており、恵まれた執筆環境であったことが窺われる。

二十二歳のとき長男、二十九歳のとき長女が誕生。その間「こころの華」に翻訳を寄稿したり、合同歌集に参加するなどの活動が見られる。一九一三（大正二）年、短編小説の発表時に初めて用いた「松村みね子」なる筆名の由来について、電車で見かけた愛らしい少女の持ち物である雨傘に書かれていた名を借りたのだと新聞のインタビューで答えており、その後、松村名でアイルランド文学をはじめとする翻訳を手がけるようになる。

アイルランドでは十九世紀末より、支配国イギリスから文化的独立を図るための文芸復興運動が盛んで、菊池寛など大正期の作家はそうした文学を積極的に翻案した。古い伝承に現代性を加味してライトする海彼の試みと、芥川龍之介の王朝ものの試みとの共通性を井村君江は指摘している（フィオナ・マクラウド著、松村みね子訳『かなしき女王』解題、ちくま文庫）。その芥川は、片山廣子の第一歌集『翡翠』の書評を別名で執筆。両者の縁の始まりである。

『翡翠』——二重の「我」

わが指に小さく光る青き石見つつも遠
きわたつみを恋ふ

いぶかしみ世は我を見るわたつみの底
より来つる少女の如く

百年の前に死にける我ならむふと帰り
来し見知らぬ人は

あまつ世の魂の足音も聞ゆらし夢の国
行くあかつきの時

我が世にもつくづくあきぬ海賊の船な
ど来たれ胸さわがしに

よろこびかのぞみか我にふと来る翡翠
の羽のかるきはばたき

これらの歌三百首を収めた『翡翠』は一九一六（大正五）年、竹柏会出版部から刊行された。こうして引いてみると、行間から「自分はずいぶんここにいるのだらう」という呟きが聞こえてくるようだ。遠い海や別の世を恋わずにいられない自分の存在は、自明ではない。佐佐木幸綱はこの歌集に「われ」という語が多いことを指摘している（月曜社版『野に住

みて』解説）。自我への執着というより、自己の確認、点呼に見える。

翡翠の羽音もたらす明るい感情がひととき「我」を手ごたえあるものとする一方で、羽音は「我」の解纏を促す異界へのいざないとも読める。二重の「我」が浮上する。

そうした不確かな自己にとって、わが子の存在は、しかし紛れもない現実である。

我をしも親と呼ぶひと二人あり斯くおもふ時
ころをさまる

身を分けし小さき人よなれも亦心強かれ
清かれといのる

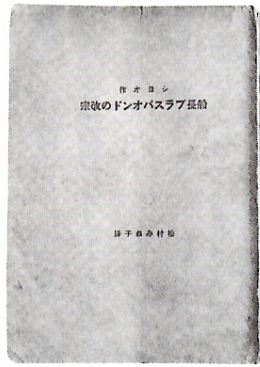
ちさき頬はねだりごとすと温かういと
和らかうわが頬による

松村みね子の筆名でアイルランド文学の翻訳家としても活躍した。晩年の写真。



片山廣子

新 歌 人 群 像



左より第1歌集『翡翠』（大正5年、竹柏会出版部）。
翻訳書『船長ブラストラブの改宗』（シヨオ作。
大正4年、竹柏会）

折々は知らぬ旅人ひとつやどにあるか
と思ふつまとわれかな
いづくにか別れむ路にいたるまで共に
行かんと思ひ定めき

自分を母ではなく「親」と称し、子どもたちを「小さき人」と呼ぶ。この一種の抽象化は、愛情が薄いというのとは違う。密室的な狭い母子関係を抜け出し、普遍的な親子関係へと視野を広げた愛し方が、表現を抽象的にさせるのだと思う。

夫婦関係の描かれ方はさらに曖昧模糊あいまいもことしており、たとえば同年齢の与謝野晶子とは対照的である。「共に行かんと思ひ定め」た相

手が夫であるなら、その思いは恋愛より同志愛に近い。広い愛し方の癖は孤独癖に通じ、片山廣子をいやおうなく、開けた野のような心象にひとりただずで佇ませたことだろう。

『野に住みて』——ひとりの歌

良家に育ち、嫁いだ片山廣子の不幸は、夫が病気がちだったことである。『翡翠』出版から四年後、四十二歳のとき貞次郎死去。一九二二（大正十一年）、関東大震災に遭遇。翌年、それまでも夏にはたびたび訪れていた軽井沢で芥川龍之介と出会い、それまでにならぬ親密な交遊の時間を持つ。

文人の集うこの地で無口な片山廣子に「山梔子夫人くちなし」と名づけたのは室生犀星であるらしい（川村湊著『物語の娘 宗瑛を探して』講談社）。堀辰雄の『聖家族』冒頭、死んだ九鬼の家に向かう細木夫人のモデルは、芥川の葬儀に参列した片山廣子である——そうした背景も交えて読まれる第二歌集『野に住みて』は、実際には晩年に近い一九五四（昭和二十九）年、第二書房より刊行された。

日の照りの一めんにおもし路のうへの
馬糞うんちにうごく青き蝶のむれ

山あひの空のあかるき日だまりにわれ
らの煙草のけむり尾をひく
わがむすめそばなる母を忘れはて野原
のなかにさびしげなるかな

湯上がりのわが見る鏡ふかぶかと青ぐ
らき部屋の中に澄みたり
わが側に人ゐるならねどゐるやうに一
つのりんご卓の上に置く

着物のこと思ふ日もあれど古びたるネ
ルのひとへを秋も冬も着る

まつすぐに素朴にいつも生きて来し吾
をみじめと思ふことあり

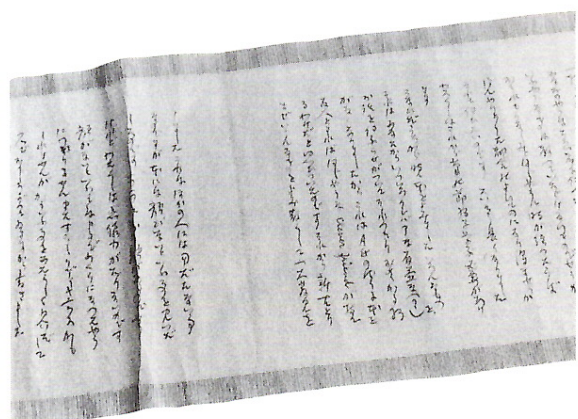
一さつの本欲しけれどけふ吾の買ひ来
りしは口に入る物

四百八十四首のうち歌集後半から引いた。四首目までは「軽井沢にありて」という章から。芥川は片山廣子のことをアララギ嫌いなのに歌がアララギ調だと冷やかしたそうだが、なるほど避暑地らしいのどかな叙景歌にはその趣がある。そんな中に、野原にいても旅館にいても孤独の膜に薄く覆われたような歌がふつとあらわれ、一連に陰翳を与えている。五首目以降は戦後の生活を扱った章「秋も冬も」の歌で、このほかに「一羽・一枚など

一という数字が頻出する。一九四四（昭和十九）年に杉並区浜田山へと疎開した翌年、長男達吉が病で急逝。商業誌に小説を発表するほどであった娘總子（筆名・宗瑛）もすでに筆を折り、結婚して東北にいた。真にひとりになった片山廣子はこの時期、あらゆる現象と一対一で対話しているかのようだ。

「待つ」老境へ

それにしても「吾をみじめと思ふことあり」とはどういうことなのか。



片山廣子から芥川龍之介に宛てた書簡。（辺見じゅん氏所蔵）

与謝野晶子や、かつて「心の花」とともに活躍した柳原白蓮ら（びやくれん）を思うとき、片山廣子の第二歌集出版までの長いブランクは引け目であったかもしれない。芥川龍之介より相聞の旋頭歌（せとうか）を寄せられ、遺稿『或阿呆の一生』において「才力の上にも格闘出来る女」と呼ばれながら、その敬愛に身を委ねず孤塁を守り通してしまった寂しさかもしれない。

憶測は憶測として、この、文字通りまっすぐで素朴な述懐は、他者に倚りかからない人にも何か告白をさせてしまう短歌というものの底知れなさをあらわにして胸を突く。

とはいえ、この告白にいたずらな深刻さはない。「野に住みて」の前年に刊行された随筆集『燈火節』（暮しの手帖社。第三回エッセイスト・クラブ賞受賞）は、いささかの感傷をおりおり軽いユーモアにくるんで伝えてくる。赤貧までは至らない程度の困窮を「ピシクいろいろるのびんばふ」と形容するセンスを念頭に戦後の歌を読むとき、哀しさより愛おしさが先立って感じられる。

待つといふ一つのことを教へられわれ
髪しろき老に入るなり

あまざかるアイルランドの詩人らをは
らからと思ひしわが夢は消えぬ

第二書房版『野に住みて』四十五ページに並ぶこの二首は、片山廣子の老境を端的に示している。翻訳からしだいに心が離れてしまつたいきさつは『燈火節』にも少し書かれていたが、短歌となるとかようにあつけなく（達吉の死に言い及ぶ歌も同様に一首しかない）、執着を嫌う性格があらわれている。ミッシヨンスクールに学んだ片山廣子が「待つ」ことを自覚したのは必然の帰結に思われる。家庭の愛、文人たちの敬愛のさらに向こうにある、遥かな誰かの愛の到来を夢みて。

生くる我とゆめみる我と手をつなぎ歩
み疲れぬ倒れて死なむ

『翡翠』

一九五七（昭和三十二年）三月十九日、永眠。半世紀を経た今、ふと連想したのは「本当の自分」「自分探し」といった現代語である。その安直さを揶揄するのはたやすい。けれども心底「今ここにいる自分が本当の自分だ」と言い切れる人がどれほどいるものだろう。表現行為が「生くる我とゆめみる我」の亀裂を回復する試みならば、この一首は、すなわち表現者の述志である。

（さとう・ゆみお「かばん」所属）